

昭和
文學全集

横光利一集

昭和二十七年十一月十一日 初版印刷
昭和二十七年十一月十五日 初版發行

昭和文學全集1
橫光利一集

著者 橫 光 利 一

發行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 佐 光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クローズ 日本クローズ工業株式會社
印刷所 曉印刷株式會社
製本所 宮田製本所

横光利一集

昭和文學全集

角川書店版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

33968

目次

卷頭寫眞

筆蹟

旅愁

解説

年譜

山本健吉

三三

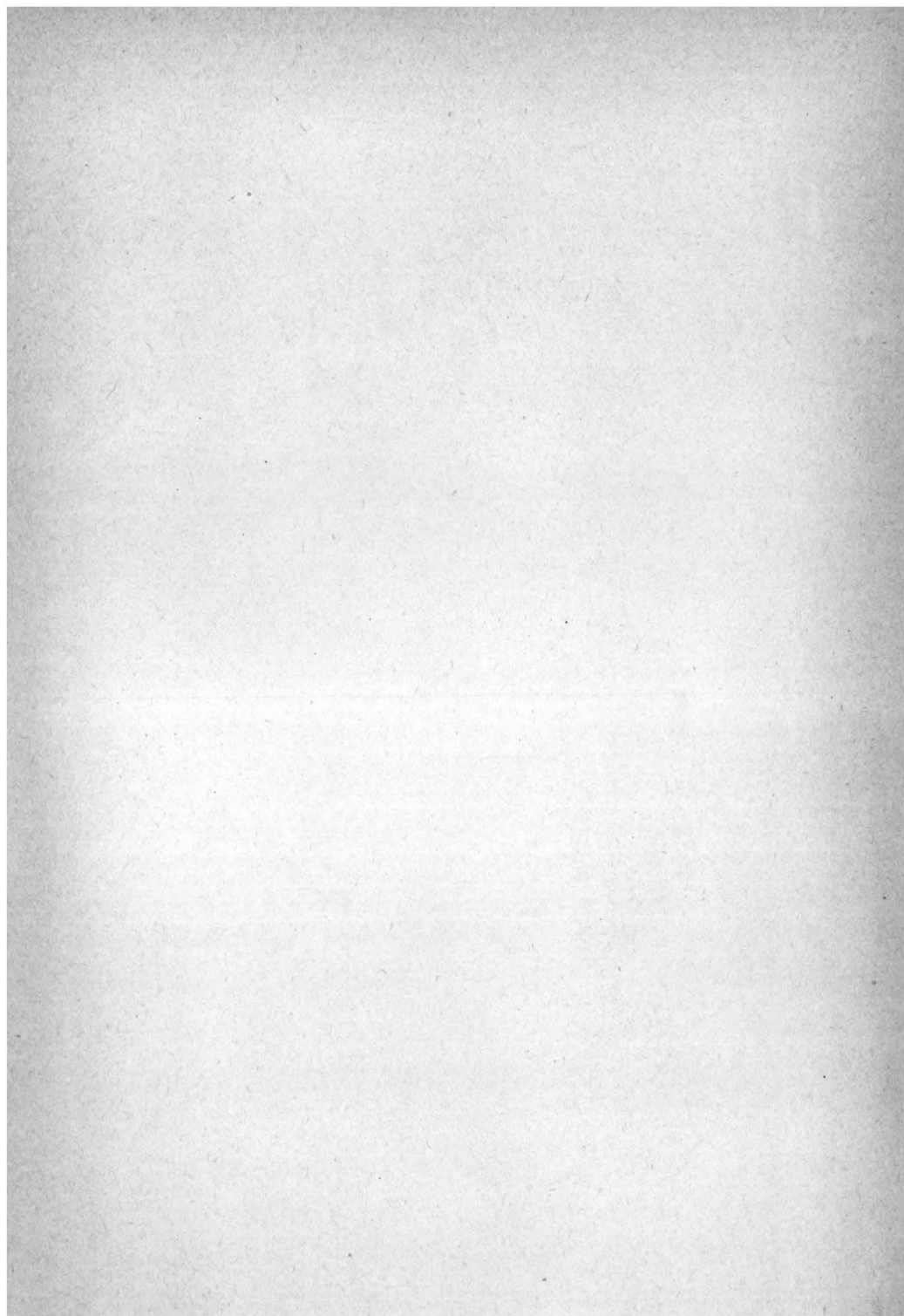
裝幀

原

弘

三六

七



橫
光
利
一
集

寒椿

しだいに雪の

明ふくて 横光

旅 愁

家を取り壊した庭の中に、白い花をつけた杏の樹がただ一本立つてゐる。復活祭の近づいた春寒い風が河岸から吹く度に、枝が慄へつつ身を落していく。パツシイからセイヌ河を登つて来た蒸氣船が、芽を吹き立てたブラターンの幹の間から物憂げな汽罐の音を響かせて来る。城砦のやうな厚い石の欄壁に肘をついて、さきから、河の水面を見降ろしてゐた久慈は石の冷たさに手首に鳥肌が立つて来た。

下の水際の敷石の間から草が萌え出し、流れに揺れてゐる細い杭の周囲にはコルクの栓が密集して浮いてゐる。

「どうも、お待たせして失禮。」

日本にある叔父から手紙の命令で、ユダヤ人の貿易商を訪問して戻つて来た矢代は、久慈の姿を見て近よつて来ると云つた。二人は河岸に添つてエツフェル塔の方へ歩いていった。

「日本の陶器會社がテエランの陶器會社から模造品を造つてくれと頼まれたので、造つてみたところが、本物より良く出来たのでテエ

ランの陶器會社が潰れてしまつたさうだ。それで造つた日本もそれは氣の毒なことをしたといふので、今になつて周章で出したといふんだが、しかし、やるんだねなかなか。一番ヨーロッパを引つかき廻してゐるのは、陶器會社かもしれないぜ。」

久慈は矢代の云ふことなど聞いてゐなかつた。彼は明日ロンドンから来る千鶴子の處置について考へてゐるのである。二人は橋の上まで来るとどちらからともなくまた立ち停つた。

眼も痛くなる夕日を照り返した水面には船のやうな家が鎖でつながれたまま浮いてゐる。錆びた鐵材の積み上つてゐる河岸は大博覽會の準備工事のために掘り返されてゐるが、どこことなく働く人も悠長で、休んでばかりゐるやうなのどかな風情が一層春のおもかげを漂はせてゐた。

エツフェル塔の裾が裳のやうに擴がり張つてゐる下まで来ると、對岸のトロカデロの公園内に打ち込む鐵筋の音が、間延びのした調子を傳へて来る。渦を巻かした水が、橋の足に彫刻された今にも脱け落ちさうな裸女の美しい腰の下を流れて行く。

「明日千鶴子さんがロンドンから来るんだよ。君、知つてゐるのか。」

矢代は久慈にそのやうに云はれると瞬間心に灯の點くを感じた。

「ふむ、それは知らなかつたな。何んで来る

んだろ。」

「飛行機だ。來たら宿をどこにしたもんだらう。君に良い考へはないかね。」

「さア。」

かう矢代は云つたものの、しかし、千鶴子がどうして久慈にばかり手紙を寄こしたものが怪しめば怪しまれた。

エツフェル塔が次第に後になつて行くに隨つて河岸に連なるマロニエの幹も太さを増した。およそ二抱へもあらうか。磨かぬ石炭のやうに黒黒と堅さうな幹は盛り繁つた若葉を垂れ、その葉叢の一群ごとに、やがて花にならうとする穂のうす白い蕾も頭を擡げようとしてゐた。

晚餐にはまだ間があつた。矢代と久慈はセーヌ河に添つてナポレオンの墓場のあるアンバライドの傍まで来た。燦んだ黒い建物や彫像の壁の雨と風に打たれる凸線の部分は、雪を冠つたやうに白く浮き上つて見えてゐる。その前にかかつた橋は世界第一と稱せられるものであるが、見たところ白い象牙の寶冠のやうである。欄柱に群り立つた鈴のやうな白球燈と豐麗な女神の立像は、對岸の綠色濃やかなサンゼリゼの森の上に浮き上り、樹間を流れる自動車も橋の女神の使者かと思えるほど、この橋は壯麗を極めてゐた。

矢代は間もなく見る千鶴子の様子を考へてみた。彼の頭に浮んだものは、日本から来るまでの船中の千鶴子の姿であつたが、さだめ

し彼女も別れてからはさまざまな苦勞を自分同様に續けたことであらうと思はれた。

「千鶴子さん、長くパリにあるのかね。」

と矢代は久慈に訊ねてみた。

「長くはゐないだらう、フロウレンスへ行きたいんださうだが、君に宜敷くつて終りに書いてあつたよ。」

「終りにか。」

と矢代は云つて笑つた。矢代は久慈とも同船で來たのであつた。久慈は社會學の勉強といふ名目のかたはら美術の研究が主であり、矢代は歴史の實習かたがた近代文化の様相の觀察に來たのだが、船の中では久慈だけ千鶴子と親しくなつた。矢代は今も彼らとともにマルセーユまで來た日の港の風景を思ひ浮べた。

「もう一度僕はビナンへ行きたいね。あそこは幻燈を見るやうな氣がするが、君はあのあたりから千鶴子さんの後ばかり追つかけて廻してゐたぢやないか。あれも幻燈だつたのかい？」

と矢代は云つてからかつた。

「いや、あのときは夢を見てゐるやうなものさ。何をしたのかもう忘れたよ。マルセーユへ上つた途端に眼が醒めたみたいで、どうして自分があんなに千鶴子さんの後ばかり追ひ廻したのか分らないんだ。いまだにあのときのことを思ふと不思議な氣がするね。」

「とにかく、あのマラツカ海峡といふのは地

上の魔宮だよ。あそこ味だけは阿片みたいで、思ひ出しても頭がぼつとして來るね。あんな所に文化なんかあつちや溜らないぜ。あ奴が一番われわれには恐ろしい。」

アンバリイドからケエドルセイにかかつて來ると、河岸の欄壁に添つて古本屋がつづいて來た。一間ほどのうす緑の箱が蓋を屋根のやうに開いてゐる中に、ぎつしり本や繪を詰めた露店であるが、上からは樹の芽が垂れ下り魚釣る人の姿も眞下のセーヌ河の水際に蹲んでゐる。矢代は前方の島の中から霞んで來たノートルダムの大塔を望みながら云つた。

「僕はカイロの回教のお寺も忘れられないね。あれはこのヨーロッパに自然科學を吹き込んだサラセン文化の頂上のものだが、ナポレオンがあつたの寺を見て、癪に觸つて、大砲をぶつ放したのもよく分るね。ナポレオンが日本へ來てゐたら、第一番に本願寺へ大砲をぶち込んでゐたぜ。」

さう云へば矢代はエジプトのカイロのことを思ひ出す。あのピラミッドの眞暗な穴の中を憂しく千鶴子を助けて登つた久慈の姿を思ひ出す。

エジプトまでは矢代と久慈はまだ親しい仲だとは云へなかつた。それと云ふのは、同船の客が港の上陸の際にもサロンでの交遊にも、二派に別れてそれぞれ行動を共にしてゐたからであつた。これらの二組の中には若い

婦人も混つてゐた。久慈の方にはロンドンの兄の所へ行くといふ千鶴子がゐた。今一方の組の中には、ウキーンの良人の傍へ行くといふ、早坂眞紀子が中心になつてゐた。矢代は上海に半ヶ月ばかり滞在してから、スマトラその他の南洋の港を一ヶ月ほど廻り、シンガポールから初めて久慈たちの船に乗船したため、これらの二組のどちらでもなく中立派の態度をとつて自由にしてゐたが、一度び船がスエズに入港してカイロ行の團體を募集したときから、この二派の關係は亂れて來た。

船がスエズからポートサイドまで出る一晝夜の間に、カイロ行の團體は陸路沙漠を横切りカイロへ出て、ピラミッドを見物してからポートサイドに廻つてゐる船まで、汽車で追つかねばならぬのである。随つてこの急がしい旅には二派の反目など誰も考へてゐられる間はなかつた。いよいよカイロ行の一團は、千鶴子の組も眞紀子の組も吳越同舟で三臺の自動車に分乘した。

そのとき矢代は最後に遅れて自動車に乗らうとするどこの自動車にも席がなかつた。矢代はうろうろしながら席を覗いてゐるうちに一臺の自動車から急に久慈が飛び降り、「こちうへいらつしやい。ここが空いてゐますから。」と矢代にすすめた。

久慈は矢代を自分の席へ入れると自分が運轉手臺に廻らうとした。

「いやいや、それはいけませんよ。」

かう矢代は云つたがそのときはもう久慈は運轉手の横に乗つてゐた。矢代がそのまま久慈の席へ納ると同時に自動車は迂り出した。車内では矢代の横に眞紀子がゐて、その横にある船會社の重役の沖がゐた。沖と矢代は船中から親しかつたが、この四人が一緒になることはそれまでになかつたことであつた。矢代はこのときから久慈や眞紀子とも親しさが増して來たのである。

ポートサイドから船が地中海へ進んで行くとき、船客たちはすでに上陸の準備をそろそろし始めたが、矢代はまだそれまで千鶴子とは言葉を云つたことが一度もなかつた。

ある夜、イタリヤへ船がかかり渦巻の多いシリイ島を越えた次の夜であつた。一團の船客たちは突然左舷の欄干へ駆け集つた。矢代も人と一緒に甲板へ出て、沖の方を見ると、眞暗な沖の波の上でストロンボリの噴火が三角の島の頂上から、山の斜面へ落岩の火の塊りをずるずる迂り流してゐるところだつた。

「まア、綺麗ですこと。」

と千鶴子が感嘆の聲を放つた。彼女としては傍にゐるものが矢代だと氣附かずに云つたのだが、しかし、矢代も思はず、

「綺麗ですね。」

と口に出した。千鶴子は傍のものが矢代だと識ると、どういふものかつと身を退けて甲板からサロンの中へ遁入つてしまつた。慎し

み深い大きな眼の底にどこか不似合な大膽さも潜めてゐて、上唇の小さな黒子が片頬の壓とよく調和をとつて動くのが心に残る表情だつた。

次の日、地中海は荒れて船の動搖が激しくなつた。矢代は夕日の落ちかからうとするコルシカ島の斷崖を眺めながら、甲板の上に立つてゐた。ときどき波が甲板に打ち上つた。あたりは人一人も見えず冷たい風が波の飛沫とともに矢代の顔に吹きかかつた。彼は欄干のドアが開いて近づいて來た靴音がびたりと停つた。矢代は煙草に火を點けたがマツチは幾本擦つても潮濕りの風に吹き消された。彼はマツチを取りにサロンへ戻らうとして後ろを向くと、そこに食堂へ遁入る前らしい千鶴子が花模様のイブニングで一人立つてゐた。

「あう、失禮ですが、パリのほうへいらつしやるんでございますか。」

と千鶴子は寒さで幾分青ざめた顔を眞直ぐに矢代に向けて訊ねた。

「さうです。」

「ぢや、もう明日お別れですわね。皆さん、そはそはしてらつしやいましてよ。」

「さうでせうな。」

矢代は火の點かぬ煙草を口に咥へて笑つた。

「あたしも皆さんと御一緒に、マルセーヌで

降りたいんですけれど、やはり、このままロンドンまで行くことに決めましたの、あら、まアあんなにお日さま大きくなりましたわ。」と、突然千鶴子は嬉しさうに云つて夕日を受けた唇のまぎれぬコルシカ島の上を指差した。

「左のこのサルヂニアでガリバルディが生れたといふんですが、ナポレオンと向き合つてゐるところは面白いですね。」

「何となくそんな人の出さうな氣がしますのね。」

船は首を上げたり下げたりしつつ夕日に向つて苦しげに進んでいつた。見てゐてもその様子は氣息奄奄といふ感じで、思はずこちらの肩にも力が入つた。ぱつと甲板に打ち上つた波は背光を受けたコルシカの岩より高く裂け散つて、人家も見えず、左方に長く連つた岬岬とした灰藍色のサルヂニアが見る間に夕日の色とともに變つていつた。

「ここは靜かなところだと思つてゐましたけど、地中海が一番荒れますのね。」

と千鶴子は額に手を翳し、飛び散る泡にも減げず云つた。

「さうですね。しかし、まア、幸ひにこれほどで何よりでしたよ。ナポリへ船の寄らないのが残念ですが。――」

吹きつける風が千鶴子のドレスをびたりと身體につけたままはたはたと裾を前方に靡かせる。

「コロンボまで來たとき、一番日本へ歸りた

いと思ひましたが、ここまで来ると、もうただわくわくするだけで、何んだかちつとも分らなくなりましてわ。」

矢代は軽く頷いた。彼は今の自分を考へると、何となく、戦場に出て行く兵士の氣持ちに似てゐるやうに思つた。長い間、日本がさまざまなことを學んだヨーロッパである。そして同時に日本がそのため絶えず屈辱を忍ばせられたヨーロッパであつた。

地中海へ這入つて以來、憧れの底から無性に襲ふこのやうないら立たしさは、船が進めば進むほど矢代の胸中に起つて來たのも、やはり來て見なければならぬことの一つだと矢代には思はれた。全くこつそりと起る人知れぬこんな心は、悪用すれば無限のないものにちがひない。先づ靜かに寢かしつけておかうと思つても、何ものか寢てる子供を揺り醒ますものが絶えず波の中から靈魂のやうにさ迷ふて來るのだつた。間もなく、夕食の合圖のオルゴールが船室の方から鳴つて來ると、矢代はタキシードを着替へに自分の部屋へ這入つていつた。

船の中の食堂は最後の晚餐だといふので常にも増した裝飾であつた。船客たちもこの夜はタキシードに姿を變へずらりと卓に並んでゐた。女は女同士のテーブルに並ぶ習慣もいつのころから破れたのも、この夜だけは千鶴子と眞紀子が神妙に前の習慣に戻つて面白

さうに話すのが、矢代の方から眺められた。食事がだんだん進んでいつて空腹が満されて來たところ、突然一隅から紙爆彈の音がした。

一同はツとしたと思ふと同時にあちこちのテーブルからも爆發し始めた。外人を狙つてテンプを投げつける。外人たちから返つて來る。婦人を狙つて投げつける。それぞれに紙の帽子を冠り、わあわあ騒ぎ立つて來るに随つて、咲き連つてゐる造花の櫻の枝枝にテンプが龍のやうに垂れる。

船客たちは今宵が最後の船だと思ふばかりではない。地中海へ這入つてからは七色の虹に包まれたやうな幻に憑かれてゐるうへに、ここまで來れば後へは歸れぬ背水の思ひである。酒一滴も出ないのに頭は酔ひの廻つた酔漢のやうになつてゐる。明日はいよいよ敵陣へ乗り込むのである。日本の國土といつてはこの船だけである。

このやうに思ふ氣持ちは各人に共通であるから、櫻も今は當分の見納めと、うす濁つた造花の櫻の花曇りも上野の花のやうに見えて來る。すると、食堂での騒ぎは間もなく甲板の上へ崩れて行つてそこで踊りとなつて來た。

二等の甲板の方からも踊りの出来るものはやつて來て一緒に踊つた。眞紀子はフランス人と初めは踊り、次ぎにはいつものパーティでよく顔を會す踊りの巧い、美貌の支那人の高有明といふ青年と踊つた。久慈は千鶴子

と組んだ。彼は快活な性質であつたから外人たちより踊りが自由で上手かつた。

矢代は踊つてゐる久慈の姿を見てゐると、パリへ行つてもこの人と友人になつてゐれば、さだめしき日が愉快に過せるであらうと思ふのだつた。ところがそのとき急に踊り見物の一角が賑やかな騒ぎになつた。いつも物云ふこともない靜かな三島と云ふ機械技師が酒の酔ひが出たものと見え、いきなり隣りの外人の婦人の肩を親しうに叩きながら靴を脱がせと云ひ出した。日ごろの音無しい三島を知つてゐるものからは轉けるやうに笑ひ出すと、また誰彼かまはず肩を叩き廻つて靴を脱がさうとしたが、やがてそれも餘興の一つとなると踊りは一層甲板で賑つた。

「ぢや、わしも一つ、踊らうか。」

と、老人の沖氏は立ち上つて、高と踊り終へたばかりの眞紀子にまた申し込んだ。この船會社の重役は船客たちの中で一番年長者であり、自分で自ら、「私は不良老年で、」と人人に高言するほど潤達自由で豊かな知識を持つた紳士であつた。船中でのテイパティのときもよくこの老人は外人たちに巧みな英語で演説した。頭の鉢が大きく開き、強い近眼の上に鼻がまた素晴らしく大きくて赤かつたが、その奇怪な容貌のやうにこのときの沖氏の踊りもひどく下手いといふよりも初めから巧みに踊らうとは考へてゐるない踊りである。「あは、あは、」とただ笑ひながら足踏み

してゐるだけだ。眞紀子も自然に笑ひ崩れてときどき立ち停り、あたりの踊りへ突きあたると。見てゐるものもその度にどつと笑ふ。

「いや、これはワルツだね。」と沖氏は云つて、「どうです、皆さん。今夜が最後ですよ。いつそのことおけさでもやるか。無禮講ぢや。」

「よし、やらう。」

沖氏の元氣に若者たちも火を點けられると、もう甲板の上の踊りなど皆に面白くなかつた。外人や支那人をそのままこへはふり出して踊りに任せ、一同サロソへどやどやと這入つていつて日本人ばかりで酋長の娘から初め出した。それがさくら音頭から東京音頭となり、野崎小唄となり、だんだん進んでいくに随つて、たうとうあなたと呼べばといふのになつた。若者たちはも早や胸を絞られ遠い日本の空の思ひに足もひつくり返つて来るのだった。中には非文化的なことをこまで來てもやるとはけしからぬと怒つて自室へ引つ込むものも一二あつたが、むらむらと舞ひ立つた一團の妖氣のやうな粘りつこい強さには爆かれた水のやうに力がなかつた。

船客たちの唄が盡きたころになると、そのまま解散するのも互に惜しまれて次ぎにはそれぞれ隠し藝することになつた。進行係は皆の意見で沖氏となつた。長唄を謡ふものや詩吟をやるもの、踊るものなどが現れた後、今度は眞紀子に何かやれやれと皆がすすめ

た。眞紀子は初めの間は躊躇してゐたが沖氏に立つて來られると、

「ぢや、やりますわ。」

と逃げるやうにピアノの傍へよつていつた。船客たちは長い航海中、誰も眞紀子のピアノを聴いたものがなかつたからこの意外な餘興に拍手をあげて喜んだ。

「何をやるんです。」

傍へよつて訊ねる沖氏に眞紀子は小聲で短く何ごとか囁いた。

「ははア。」と沖氏は云つて満足さうに一同の方に向き、「えー皆さん、これからわれらの眞紀子夫人は、ドナウの流れといふ曲を弾かれますから御清聴を願ひます。これはウキーンにゐられる御主人のことを忍ばれた曲でありまして、いささか皆さまにとりましてはお聞き苦しいかと存ぜられますが。——」

ここまで沖氏が云ふと床の緋の絨毯を靴で打つものや奇聲を發するものがあつたがすぐピアノは鳴り出した。背中少し開いた眞紀子のソアレの割れ目から緩急に随ひ、人より白い皮膚が自由な波のやうに揺れ動くと、三島は「はおう。」と輕輕な歎息をもらしたのでもたどつと皆は笑ひを立てるのだった。餘興のこととて曲は手輕に迄つて終つたとき、

拍手の中を沖氏がまた立ち上つた。

「皆さん、今の御演奏はまことに御立派なものだと、感服いたしました。これは一重に明日マルセーユへ現れる御主人のことを、毎日

毎日思ひつづけられた波徳の結果かと存ぜられます。次に一つ、千鶴子さんにお願ひします。」

千鶴子は眞紀子の彈奏中にすでに次ぎに廻つて來るものと覺悟をしてゐたものと見えて、すぐ噤せず立ち上つた。

「あたくしはピアノが下手でございますから、唄にさせて貰ひます。」

「何んです何んです。」と云ふものがあつた。

「伴奏、伴奏」と誰かが云ふと、眞紀子が再度ピアノの傍へ沖氏に引つ立てられたが、三島は突然眞紀子の傍へよつていつて、「靴、靴。」と云ひながら裾の方へ踏み込んだ。沖氏は一寸不愉快さうな顔になると三島の肩を摑んで自分の席へ連れ戻つた。

「ここはまだ船の中でございますが、明日は皆さま、パリへお立ちになる方が多いでございますから。」

千鶴子がこのまで云つたとき三島がまた、「パリの屋根の下。」

と叫んだ。もう子供と同じやうになつてゐる皆の者は手を打つて喜んだ。千鶴子は眞紀子に一寸會釋をしてからパリの屋根の下を唄ひ出した。

かんてるゆうばんたん

さびいえいゆまさん

るいでいつたんじゅうるたん

どるまん

だんのうとるろつじゆまん

じえ。いねすうばあん
ぶらるてるべいるふあれどら
るじやん

唄がすすむままに一同はもう上機嫌になつて、間もなく眼の前に現れて来るパリの實物に接した思ひで、それぞれ首を振り振り唄ふのであつた。この唄は一度終るともう一度も一度と、皆は千鶴子をせきたててやめなかつた。

今日はいよいよマルセーユへ著くといふので船客たちは朝から誰も落ちつきがなかつた。食卓のボーイや酒房や部屋つきのボーイにチップをやらねばならぬ。客たちはあちらこちらに塊つて幾らやるべきかといふ相談をしてゐた。誰か一人の者が巨額のチップを與へれば他の者が不愉快になる。長らく共同の生活をしたのであるから、均衡を亂しては船中の愉快さも最後の一日で消えてしまふ。このことは禮儀として一應船客たちの誰も考へねばならぬ最も重要なことであつた。勿論、印度洋あたりの無聊なときに、チップの金額を一定にしようと云ひ出すものがあつて、すでに金額は定つてゐたのだが、さて支拂ひとなつて規定のことも破れてしまふ。別れてしまふのも後数時間のことである。あれほど親しかつたものたちも、「別れてしまへば、」と思ふと、誰もうとましくなるものであつた。船中は楽しかつたとはいへ團體生活であるか

ら、思へば誰にも自由がなかつた。不快なことがあつても忍耐してゐなければならぬ。殊に同じ一等の船客ばかりであつてみれば、日ごろ日本にあるときの地位や名譽や財産などは、何の權威にもならなかつた。階級差別の何もなくつてしまつてゐるこのやうな所では、ただ人の性格と年齢だけが他人に働きかけるだけである。

船客たちが團體で港港に上陸したときの金銭の貸借も、今日は整理をするのだが、誰が誰に貸しがあり誰が誰に借りがあるかは、もはや混雜して分らなくなつてゐる上に、僅の金を返せ返せと云つて廻る面倒も若者たちはしたくなかつた。それを知つた沖氏は自分からその面倒な整理を申し出た。

「僕は日ごろ他人を使つてばかりゐて、使はれたことがないから、こんなときでも一つ使はれてみませう。」

かう云つて沖氏は人人の間を皿を持つて廻り、他人の複雑な貸借をいちいち整理して歩いた。船の中では老人は威張れないが、この沖氏は諸語と滑稽さとしてやすやす若者たちを統御して最後の務めもし終へたのである。

「さア、これで良しと。」

いつ船が着いてもかまはない。中にはまだ陸も見えぬのにもう早く帽子まで冠つてゐるものもある。甲板に出てみたりサロンに引つこんだり、船中を隈なく歩いてみたり、不安さうな顔つきで話さへあまり誰もし合はない。

すると、突然、矢代に、長いそれまでの船中の生活で日本語を知つてゐる様子を一度も見せたことのないフランス人が、驚くやうな流暢な日本語で、

「どうです、いいよですな。」と話しかけた。船中の外人は一度び船へ這入れれば誰も日本語を使はない、全く知らぬ様子で人の話を聞いてゐるのが例だから用心をするやうとの訓戒も、初めて、なるほどと今になつて矢代は氣が附くのだつた。

「圓をフランに今しとく方が、都合が良いですか。」

「さうさう、少しばかりしときなさい。」

と、フランス人は答へた。しばらくして、

「そら、見えたぞ。」と云ふものがあつた。矢代は甲板に立つと、お菓子子の石のやうな灰白色の島が波に噛み砕かれてゐるのが眼についた。

甲板に立つ船客たちはだんだん多くなつて來た。誰も笑ふものはない。海上に連つた銀鼠色の低い岩が後へ後へと過ぎてゆく。瑠璃色の鋭い波の上には風が強い。

久慈と矢代はまだ見ぬヨーロッパの土の匂ひを嗅ぐやうに、サロンデッキの欄干に身をよせかけ黙つてさつきから眺めてゐたが、突然、久慈は、

「何んだ、これや、クリスマス・ケーキみたいな所だな。」

と呟いた。一同どつと笑ひ出して、

「さうださうだ。」

と云ふ。しかし、すぐまた黙ると、これは日本で習つた禮儀作法や習慣は、何一つ通用しさうもないと、そろそろ身の處置にまごまごする不安が一同の顔に現れた。息の仕方もここでは頭でしなればならぬ。群れよる。鯨の大群の中へ僅かな鮓がひらひらさ迷ひ出るやうに、押し潰されさうな幻覺を感じ、岩を噛む波の色までお伽噺の中の人魚を洗ふ波かと思える。

「向ふに見えます島は、デユウマの小説に出て来る巖窟王の幽閉された岩屋です。」と一人の船員が説明した。

「マルセーユはどこですか。」と一人が訊ねた。

「もうすぐです。この島はマルセーユの外郭です。」

「セメントでも出さうなところですね。」と矢代は云ふと、

「さうです。マルセーユはセメントの産地ですから。たしかにさう見えませうな。」

と船員が答へた。大きな波が一つねりどつと來ればたちまち姿を没しさうな小さな島が、當時の偉人を幽閉するに恰好な島だとは、矢代も、それ一つでこの國の優雅さがすでに頭に這入つて來るのだつた。

船が島を廻ると長方形のマルセーユの内港が、波も靜かに明るい日光の中に見えて來た。船は速力をゆるめ徐徐に錨の群れてゐる

港の中に這入つていつた。鋸形に曲つた突堤と埠頭の兩側から、吊り橋のやうに起重機が連り下つてゐる。その向ふの各國の汽船のぎつしり身をせばめて並んでゐる中に、今やこれから日本へ歸らうとする香取丸が、剽悍な黒い小さな船尾だけ覗かせ煙を吐いて泊つてゐた。あの科學の塊りのやうに見えてゐた汽船が、今は無科學の生物のやうに見えて來る。

「香取がもう立ちますよ。日本へ歸るんですよ。」

と船員が、もうすつかり日本を忘れてしまつてゐる皆の船客たちに齒痒ゆさうな聲で報らせた。しかし、今著いたばかりの一同には、もう知りぬいて倦き倦きしてゐる日本の船のことなど考へてゐる暇はなかつた。まつたくの所、まだ見たこともないヨーロッパが足の下に實物となつて横たはつてゐるのである。早くこの怪物を一つ足でぎゆうつと踏んでみたい。しんと息を飲み込んだ鋭い無氣味な靜けさが船客たちの間に浸み渡つた。物憂くなるほどの明るい光線を浴びて、人人はただ船足の停るのを今か今かと見守つてゐるばかりである。

矢代は、いつの間にやらゴールへ來てしまつた自分を感じた。船はマルセーユの埠頭へ胴を横たへようとしてゐる。靜かな靜かなそのひと時だつた。――

矢代は、今まで自分を動かして來た總ての

力もここでぶつりと斷ち切れ、全く新しい、まだ知らぬ力がこれから先の自分を動かして行くのだと思つた。やがて、船から梯子が埠頭へ降ろされた。どやどやと梯子を登つて來るヨーロッパの人間の聲が聞える。

「では、皆さんどうも、長とお世話になりました。」

一人の船客が別れの挨拶をした。
「ではお身體お大切に。」
「さようなら。」

かういふ會話の後で、急に、
「ああ、香取丸が出て行くよ。」

といふものがあつた。矢代は見ると、小さな香取が船尾を動かし、靜かに體を曲げ、河の未練氣もなくさつぱりとした態度でさつさとマルセーユの陸から離れていつた。

「僕も歸りたいなア。」

と船客の一人が溜息をついた。矢代も甲板に立つて香取の姿が煙を流し見るまに港の外へ消えて行くのを眺めてゐたが、間もなく始まる上陸である。これから上陸許可證を貰ひ荷物の検査もすまさればならぬ。矢代は出て行つた香取の行方を見送りつつ、「ちや、さようなら。」と胸の中で云つてゐるときだつた。

眞紀子が良人らしい中年の紳士を連れて來て矢代に云つた。

「これ宅でございますの。」

「さうですか、いろいろ船中ではお世話にな

りました。」

「いや私の方こそ、御迷惑をおかけしまして有り難うございました。」

肩幅のある早坂氏が微笑を含み、鄭重な挨拶の横からまた眞紀子が嬉しうに云つた。

「もしウキーンの方へでもいらつしやることにございましたら、どうぞ、是非いらして下さいましな。」

「ありがたうございます。そのうちに、一度あちらへも廻りたいと思ひますから、そのときにはお願いします。」

どことなく一抹の冷たい表情で早坂氏は禮をする、妻の荷物の方へ去つていつた。後のサロンではパリへ行く船客たちが一團となつて、今夜もう一度船へ歸つて泊めて貰ひ、明朝早く揃つてパリへ行かうといふ相談が一致しかけてゐた。このやうな時でも沖氏はいつもの馴れた調子で、

「さうさう、さうしなさい。今夜はゆつくりマルセーユで遊びませう。久慈さん、私はあなたを愛しますといふのは、フランス語ぢや、どういふんですか。これさへ覚ええとけば、もう大丈夫だ。」

一同が聲を揃へて笑ふとすでに一團の行動はそれで定められたと同じであつた。

「つれしやるまん。といふんです。」とある商務官が洒落て云つた。

「つれしやるまん。つれしやるまん。」と幾度も沖氏は呟いてみてゐてから、

「マルセーユつれしやるまん覚えけり、と、これや、どうです。」

ときどき船中で試みた俳句の手腕を沖氏は早速使つてまた皆を笑はせた。

荷物も税關もすませてから、何となく遠しいごたごたとした気持ちのまま船客たちは自動車に分乗してマルセーユの街の中へ流れ込んだ。街は税關の門を一步出ると、早くも敷石の上に積み上つてゐる櫛の色から藝術の匂ひが立ちこめて襲つて來た。車が這つて行く、立ち並ぶ街路樹が日本の神社佛閣にある巨木と同様に鬱蒼として太かつた。まるで街路が公園のやうで、兩側の石の建物を突き跳さうに路いづばいに枝を擡げた大樹の下を、

惜しげもなく車は驅けていく。どこの街か分らなかつたが、これが馬車だつたら一層良かつただらうと矢代は思つた。街路樹の大きさと年を競ふやうに周圍の建物もまた古かつた。觸ればぼろぼろ崩れさうな灰色の鐵戸に新しい黄色な日覆をつけた窓窓も、文化の古さに縫ひつけた新しい鰻のやうに感じられた。

一行の自動車は坂を登つたり降りたりした。午後の四時ごろである。マルセーユの街は散歩の時間と見えて、どの通りも人がいっぱいに満ちてゐた。太陽の射してゐる街と日蔭の街とが、屈曲するごとにぐるぐる廻つて矢代の前に現れた。ある坂の四辻まで來かつたとき、「ここは去年、ユーゴスラビヤの

皇帝がピストルで暗殺なされたところです。丁度ここですよ。」

と永くこの地にある日本人の案内人が自動車を停めさせて説明した。

「軍艦を降りてから儀仗兵つきで、ここまで自動車で來られたところが、丁度ここでした。路がクロッスしてるものだから自動車が一停つたんですな。そこへつかつかと一人の乞食のやうなロシア人が來ましてね、いきなり窓ガラスを拳銃の柄でばかツと叩き壊して、續けさまに亂射したものですから、同乗してゐたフランスの外務大臣も一緒にやられました。」

この案内人はこのため近來の大衝激を受けたらしい自慢顔でさう云つたが、一行のものには何の響きもないらしい様子に失望して、馬鹿馬鹿しさうにまた自動車を走らせた。暫く行つたとき、

「これは男の跛足の多いところだね。」と久慈は窓にしがみ付くやうにして矢代に云つた。

「大戦があつたといふことが一目で分るもんだな。」

「さう云へば、笑つてるものが一人もゐないや。」

「笑つてるどころぢやないよ。これだけ人がうようよしてゐるくせに、話してる者もゐない。何をいつたいしてるんだろ。」巨大な街路樹の葉蔭で流れてゐる人人の顔

も青白く、疲れてゐるやうに口をつぐんだ。ま、誰も彼も眼だけを異様に鋭く光らせてゐるだけだつた。

「これや、もうヨーロッパ人は、考へることは皆思想より無いのだね。豪いもんだ。」

と久慈は云つた。分らぬ答案ばかり陸續と出て来るうちに車は舊港の棧橋にかかつて来た。すると、千鶴子たちを乗せた一團の車と一緒になつた。二つの車を乗せた棧橋はぶつりとその部分だけ切り放されると、海の上をそのまま對岸の方へいつていつた。

「ノートルダムですよ。向ふに見えるのは。」と案内の者が云つた。

「おや、あそこに、僕らの船が見えるぞ。」と沖氏が云つた。陸へ自動車が上がつてから、しばらく坂を登つたところに數百尺の高い斷崖が立つてゐた。その上にノートルダムがある。一行はエレベーターに乗り換へ、ケープルに乗り換へた。見る間に街は下へ沈んで行くと、半島が現れ、丘が見え、島が水平線の上から浮んで來た。

山上に立つと明るい佛南の風景は一望のものと見渡された。灰白色の陶土のやうに滑かな地の壁に、ところどころに塊り生えた樹の色は苔かと思える。海は藍碧を湛へてかすかに傾き微風にも動かぬ一抹の雲の輕やかさ。

何と明るい空だらう。と矢代は思つた。廻廊のやうな石灰岩の廣い階段を廻り登つて行

くうちに寺院へ著いた。中は暗く襪のやうな細長い蠟燭の立ち連んだ間を通り、花に埋つた一室へ足を踏み入れた。

その途端、矢代はどきりと胸を打たれた。全身蒼白に瘦せ衰へた裸體の男が口から血を吐き流したまま足もとに横たはつてゐた。

外の明るさから急に踏み這入つた暗さに、矢代の眼は狼狽してゐたとは云ふものの、いきなり度膽を抜くこの仕掛けには矢代も不快にならざるをえなかつた。それもよく注意して見るとその死體はキリストの彫像である。

皮膚の色から形の大きさ、筋に溜つた血の垂れ流れてゐるどろりとした色まで實物そのまゝの感覺で、人人を驚かさねば承知をしない、この國の文化にも矢張り一度はこんな野蠻なときもあつたのかと矢代は思つた。しかも、この野蠻さが事物をここまで克明に徹せしめなければ感覺を承服することが出来なかつたといふ人間の氣持ちである、このリアリズムの心理からこの文明が生れ育つて來たのにちがひない。それなら瞞されたのはこつちなんだ。

——矢代はひとりキリストの血の彫像の周圍を幾度も廻つてかう思つた。さうしてゐるうちにその眼目してゐるキリストの姿から、なぜこんな瘦せ衰へた姿となつてキリストが殺されねばならなかつたかといふ事情が、ははアと臍ろに分つたやうな氣持ちがするのだつた。

「ここちや、リアリズムがキリストを殺した

のだなア、つまり。」と矢代は、一つヨーロッパの祕密の端つぽを覗いてやつたぞといふ思ひで建物から外へ出た。千鶴子と久慈は早くも外の觀臺に立つて、風に吹かれながら明るい光線の降りそぐ遠方の半島を眺めてゐた。すると、それもまた幾度も日本で見たとザンヌの繪の風景そのものの實物であつた。

あの繪の具といふ色で追求に追求を重ねた實物の半島——それ以來繪畫を觀念せしめたその實物がそこにあつた。

數十日の波と船と蠻地ばかりの熱帶とを通つて來た矢代の足はこのときから少しづつ硬直し始めた。彼は太股を撫でながら日本人が文化が分るのどうのと云つたところで、それは全くわれわれ東洋とは違つた文化だとそろそろ觀念もし始めて來るのだつた。

夕食のころになつて矢代たちの一行は街へ降りレストランへ這入つた。前には道路をへだて、夕日に輝いた海が淡紅色の水面をひたひたと道路の傍まで湛へてゐた。海へ下つて來てゐるあたりの街には海草の匂ひが立ち流れ、家の中の人人の顔まで照り返つた夕日に染り、花明りによろめく蝶のやうな眩しさだつた。店の客たちは海の方を向いたまま、牡蠣の貝にナイフをあて靜かに舌をつけて楽しんでた。

「さアさア、フランスのパンが初めて食べられるぞ。」